

司会：はじめに講師の角田光代先生を、横田会長がご紹介申し上げます。

横田：本日、講演をお願いする角田光代様をご紹介いたします。会員の皆さまには、事前に資料として配付させていただいたとおり、角田様は直木賞をはじめとして、数多くの文学賞を受賞されており、今、日本中で最も作品が読まれている人気作家のおひとりです。近年は、『源氏物語』の現代語訳も果たされ、名実ともに大作家としての立場でいらっしゃる方だと思います。昨年度からご親交のある四国大学の佐々木義登先生にお取り次ぎをいただき、徳島県国語学会の皆さんに向けての講演をお願いしていたところ、快くお引き受けをいただいております。今年、やっと統一研究大会の開催ができるということで、角田様のお話が聞けるのを本当にうれしく、ありがたく思っております。角田様におかれましては、今回もぎりぎりまで徳島県にお越しいただくことを検討していただいたことで、その温かいご配慮にあらためてお礼を申し上げます。今回は、佐々木先生との対談形式でのご講演となります。なお、事前に会員の皆さま方からいただいている質問につきましては、講演のあいだに佐々木先生のほうから代わってお尋ねいただけるということで、楽しみにしててください。そのために質疑応答の時間を、ご講演の時間に振り替えて、時間いっぱいお話をお聞きいただければと思います。それでは角田様、佐々木先生、どうぞよろしく願いいたします。

角田：よろしく申し上げます。

佐々木：よろしく申し上げます。先ほど鳴門高校の横田校長先生からご紹介いただいたのですが、角田光代さんには、本来であれば徳島にお越しただけたらと思っておりましたが、ご出演いただき、本当にありがとうございます。

角田：本当に行きたかったです。今年は阿波踊りも開催されましたよね。

佐々木：そうです。阿波踊りが開催されました。

角田：よかったです。

佐々木：3年ぶりに開催されました。

角田：素晴らしい。本当によかったですね。

佐々木：角田さんは、ここ最近では徳島ともご縁があったようで、今までも2回ほど徳島にお越しただけていましたよね。

角田：その2回とも佐々木先生に呼んでいただいて行きました。

佐々木：コロナ禍が始まる前のことなので、非常に昔のことのように感じます。コロナの広がりさえなければ今回も徳島に来ていただいて、徳島のおいしいものも食べたりして、堪能していただきたいと思っておりましたが、残念です。今日は、Zoomではありますけれどもお話を伺えるということで、ご視聴してくださっている皆さま方も、本当に楽しみにしてくださっていると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

角田：よろしく願いいたします。

佐々木：私は、司会進行を仰せつかりました、四国大学日本文学科の佐々木義登と申します。拙い進行になるかもしれませんが、ご容赦ください。どうぞよろしく願いいたします。それ

では早速ですが、角田さん、実は今日のこの講演会ですが、ご視聴いただいているのが高校の国語の先生方ということもございまして、教育現場で生徒さんとのやり取りや、国語の授業の中でもフィードバックできるようなお話を、ぜひ角田さんから伺えたらと、先生方皆さんが思っておられるでしょうから、少しでもそちらのほうも意識しながら、私もお質問させていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど横田先生からもお話しいただいたのですが、多くの先生方から角田さんへのご質問を頂戴しております。私のほうからその質問を紹介させていただきながら進めていこうと思っております。今日の流れですが、おそらく皆さんが知りたいところだと思いますが、角田さんが小説家になるまでというか、おそらく小学校や中学校では普通のかわいらしいお子さんだったと思うのですが、そこからどうやって作家になられたのかというお話、それから実際に角田さんは日本を代表する小説家ですが、どんな生活をされているのか、作家生活というのはどんなものなのかというようなお話ですね。それから角田さんの代表作や、一番最近に出された『タラント』という小説作品についてもいろいろ伺いたいと思いますし、また生徒さんや若い人たちにぜひ読んでもらいたい作品なども教えていただきたいと思います。それから、角田さんは十分いろいろな作品を執筆されていますが、これからチャレンジしてみたいことや、注目している小説や書いてみたい分野がもしあれば、お話を聞かせていただきたいと思います。最後に私と角田さんとのあいだで、高校の先生方からいただいたご質問で、十分お話しできなかったものが最後に残りましたら、その部分を最後にご質問させていただいて、角田さんにできるだけ皆さんからいただいたご質問にお答えいただけるように、進めてまいりたいと思います。そのようなかたちで、短い時間ではございますが、皆さん、おつき合ください。

冒頭でも申しましたが、角田さんがどのような経緯で作家になられたのかという、デビューまでのお話を伺いたいのですが、これはおそらく先生方も大変興味深く思っておられるようでして、いただいた質問の中にも「作家になりたいと思われたのは、いくつぐらいのころですか」「他の道を考えたりはしなかったのでしょうか」というご質問をいただいておりますので、その辺りからお答えいただくような形で、ご発言いただければと思います。

角田：実は私が作家になりたいと思ったのが、小学校1～2年生のころでした。その当時に作文の宿題があって、将来なりたいたいものを作文で書いてきなさいという宿題がありまして、そのときに初めて言語化したというか、私は将来作家になりたいという作文を書きました。それが作家になりたいと思って書き記した一番最初です。そのときの7～8歳からずっと強く小説家になりたいと思っていたわけではなくて、小学校2年生のときに「作家になります」と書いてしまったが故に、私は、小学校2年生以降は勉強をしなくなっていました。算数や理科など、作家に必要なさそうだと、子どもながらに思った科目を勉強しなくなっていました。小学校の高学年のころには全て勉強についていけなかったのですが、国語だけは一生懸命やっていたので、成績も5段階で言えば5で、ほかの科目は全部2か1でした。ですので、中学校に入るころには作家になりたいというよりも、作家にならなければほ

かになりようがない状態でした。そうってしまったので、作家にならなかつたら何もなるものがないという状況で中高と過ごしました。そして高校3年生のときに、作家になりたいけれども、作文は書けるけれども、小説は書けない。その違いが何かわからない。わからないことはきっと大学に行けば教えてもらえるだろうと思い、高校3年で受験先を探し、創作科のある大学に、小説家になるために大学に進学したという流れです。

佐々木：角田さんのことなので、きっと全部オール5ぐらいだと思っていました。小説を拝読しますと、小説のなかの文章が理詰めできちっと、本当に説得力のある文章で、ずっと読み手のなかに入っていく文章ですから、これは理科と算数が2だったということは、おそらく誰も信じられないと思います。しかし、小学校1年生のころから、いわゆる夢として抱いていたということですよ。

角田：はい。

佐々木：小学校の作文では、小説家になりたいということですと通してきた感じですか。

角田：そうですね。やはり作文がとても好きだったので、それで書く方面に行きたいと思っていましたが、作文を小学校のときに非常に褒められたので、作文がうまくなっていけば作家になる道が開けるだろうと、なぜか思い込んでいまして、非常にたくさん作文を書きました。だから、作文は小中高ととても上手でした。そのほかの科目は本当にできませんでした。

佐々木：では作文マスターみたいになっていたのですね。

角田：そうですね。

佐々木：一つお聞きしてみたいのが、私がおそらく先生だったとしたら「角田くん、君は、作文は抜群に上手だけれども、ほかの勉強がさっぱりじゃないか。作文もいいけれども、ほかの勉強も頑張らないといけないじゃないか」と言って、指導するだろうと思います。そういうことはなかったのでしょうか。

角田：ありました。おそらく小中高と、数学や、科学なり、物理なり、歴史なりの授業をほぼ聞いていませんでした。好きなことをしていたので、すべての教師から嫌われていて、問題児でした。ただ、国語の先生だけは、国語ができるから相手にしてくれました。だから他の先生方は、きちんとやりなさいと親身になる以前に、私のことを大嫌いという感じだったのでないでしょうか。高校3年生になって進路を決めなければならないときに、受験のシステムもわかっていませんでしたので、担任の先生に「進路はどうするの？」と聞かれたときに、小説の勉強ができる大学に推薦を受けて行きたいと言ったら、担任の先生が「とんでもない、あなたのどこに推薦できる要素があるのか」と言われました。「態度も悪いし成績も悪いのに、誰があなたを推薦すると思っているの？」と言われたぐらいでした。

佐々木：えー、厳しいですね。

角田：それぐらい本当にほかの勉強をしていませんでした。

佐々木：角田さんは少し問題児というか。

角田：問題児でしたね。

佐々木：聞いてみたかったのですが、今日は高校の国語の先生が興味津々で聞いてくださっ

ておりますが、高校のときは、その延長線上で国語だけが突出していて、あとの数学や英語などのほかの科目は、成績としても、意欲的にもはかなり厳しい状態だったのでしょうか。

角田：私が通っていた高校が、小中高と一貫校でした。だからそのような成績でも進学することができたのですが、まず高校1年生の終わりで進路が選べました。数学や物理や科学を選択制でやらなくてもよくなりました。国語と美術や家庭科などを選ぶことができたので、高校2年生から数学的なことは一切授業として受けていませんでした。

佐々木：そうですね。ではより特化してというか、ご自身の興味、関心のある分野にのめり込むようなかたちだったようですね。

角田：そうですね。

佐々木：私は、先ほどの角田さんの話はまだ信じられませんが、どこに君を推薦する要素があるのかと、そこまで言わなくてもいいと思いましたが、それでも、推薦はしていただいたのでしょうか。

角田：いいえ、もらえませんでした。もらえないと言われて初めて、これは自分で勉強して受験するしかない気づいたのが高校3年生でした。それまで小中高の一貫校にいましたので、受験したことがありませんでした。ですから、高校3年生の夏から、生まれて初めて死に物狂いで勉強を始めたんです。予備校にも行きました。英語は、私のときは中学校から始まりましたので、まだ巻き戻せました。一から始めて死に物狂いでやったので、まだ高校生ぐらいのレベルには追いつくことができました。国語はもともとできましたから、古典も現代文ももちろん問題ありませんでした。ただ、ネックとなったのが日本史、世界史でした。日本史は勉強したことがなかったので、教科書を最初から読むと縄文時代から始まりますよね。だから縄文時代から読み始めて、何回も縄文時代から読み始めるのですが、追いつかないのです。

佐々木：なかなか追いつけないわけですね。

角田：だから、国語と英語はなんとかなるとわかって、日本史は危ないと思い、その代わりに私が受験するときには、受験科目に小論文がある大学がけっこうありました。小論文があるところは歴史がなかったのです。ですので、国語、英語、小論文です。小論文と言えば、私は作文が得意でしたので、それこそ高校3年生の一番勉強した時期に、国語の先生だけは仲がよかったので、国語の先生のところに小論文を見てほしいとお願いに行きまして、受験までのあいだ、ずっと小論文を個人的に見てもらいました。受験は10校ぐらい受けましたが、歴史の科目があるところはすべて不合格で、受かった大学は全部小論文で受かっているんですね。

佐々木：小論文の才能が突出していたのかもしれないですね。

角田：才能と努力ですよ。歴史はできないと思って、小論文を国語の先生と1対1で特訓していただいたのが大きかった気がします。

佐々木：受験で、歴史で縄文時代ばかり出てくる大学があれば受かったかもしれませんが、にわかには信じられませんか。先生方もショックを受けているかもしれませんけれど。

角田：逆に皆さん勇気が持てるかもしれません。そこまで勉強ができなくても、こうして大人になっている人間がいるということですから。

佐々木：しかし、大人になっているというよりも、日本を代表する小説家になることも不可能ではないという、夢のあるお話だと思います。私も高校の国語の教員を少しばかりやらせていただいていた時期がありましたけれども、先生方にとっては、やはり各学校の教え子の中に、一芸に秀でているけれども、何か他の分野になると、からっきし、、、というような生徒さんも多いのではないかと思います。だから、今日ご視聴いただいている先生方のクラスや、ご指導されている生徒さんたちの中にも、角田さんタイプの、これはできるけれども、他はまるっきり、、、というような生徒さんが、非常に夢を持てるのではないのでしょうか。角田さんの場合も、厳しくご指導いただいた先生でしたけれども、それは愛のムチだったのでしょう。しかし、ひょっとしたらその優れた才能を伸ばしてあげることで、本人も未来への可能性を開くことができる道筋を、先生方が導いてあげられるような状況があるのではないかと、夢を持たせていただけのようなお話だったのではないのでしょうか。そういう才能というのは、子どもたちは無限の才能があるじゃないですか。だから、どこでどんな風にその才能が伸びて花開くかというのは、未来のことはわかりませんが、その可能性というのは大変夢があるのではないかと思います。角田さんもやはりそういう生徒さんがいて、角田さんが先生だったらご自身がそうだったように、そこを伸ばしてあげようというふうに思いますか。

角田：そうですね。私は駄目なほうを見てしまうというか、こっちができるというよりも、こっちはできないということの切実さのほうが非常に自分にとってわかる気がします。この子はただ怠けているわけではなくて、本当にこれができないというときに、できないことをできるようにさせるよりも、ほかのことができるように、デコとボコにしてならして考えたほうが、子どもの方は救われるのではないのでしょうか。できないことをいくらやれと言われても、どうしてもできなかつたということ、私もいまだに覚えています。

佐々木：私も少しわかる気がします。私も高校時代に、数学が壊滅的な点数でした。

角田：そうなんですか。

佐々木：ひどかったですよ。こんなことは恥ずかしくて言えませんが、200点満点の実力テストで6点だったことがありました。あれは本当に衝撃的で、50歳を過ぎた今でもあの衝撃は忘れられません。どうやったら6点になるんだろうかという。そんな私も大学の先生にさせていただけるようなこともあるので、どこで可能性が開けるかというのは本当にわからないのです。それから高校の先生からご質問があったのが、今までの話に関係するかと思えますけれども、角田先生ご自身は、読書感想文を書くのは得意でしたかというご質問です。小論文は非常に得意だったというお話を先ほど伺いましたが、夏休みで生徒さんが宿題として読書感想文などされていると思うのですが、角田さんは、読書感想文は得意でしたか。

角田：私は非常に得意でした。最近になって読書感想文の是非が世間的に言われているという風潮を感じます。自分も書いていて苦痛だったので、あのようなものを書かせるべきでは

ないという大人の方もけっこういますよね。個性をつぶすようなことではないかと、問題視するような声が聞こえてきますが、私は作文と一緒に、読書感想文はとても好きでした。一つ覚えているエピソードが、確か中学校のころだったと思いますが、『伊豆の踊子』の感想文を書くことがありまして、感想文にものすごくつまらないと書いたことがありました。

佐々木：『伊豆の踊子』がですか。

角田：はい。これはこの作者が生きていた時代であれば、踊り子と言葉を少しだけ交わしてすれ違うだけの関係で、本当にゆっくりした時間の流れであったり、なんの関わりも持たないであろう、はかない感じが、昔の時代ならいいのかもしれないけれども、その当時の昭和を生きている私にとっては、まったく何が面白いのかわかかならないし、のんびりしすぎていらいらするというようなことを書いたんですよ。

佐々木：すごいことを書きましたね。

角田：それは正直な気持ちでした。しかし、それが褒められたんです。「なるほどそういう読み方もあるのですね」というふうに褒められたのです。おそらくその経験があったので、読書感想文というのは何を書いてもいいし、本というのはどんな読み方をしてもいいのだ、ということ、その一つの感想文で体感として学んだんだと思います。その感想文のことを覚えていましたので、30歳を過ぎて『伊豆の踊子』を読み返したときに感動が違って、なんてすごい話なんだろうと打ち震えてしまい、14～15歳の自分が本当にただの無知であって、自分が生きている狭い世界しか知らなかった、言葉の美しさについても考えたことがなかった、本当に年齢によってこんなにも違うものなんだということ、30代半ばぐらいに気づいたという経験がありました。読書感想文というのはそういう長い目で読書をしていただけるいい機会にもなると、私は思っています。ですから、読書感想文が一概に悪である、とか、書かせることに意味があるのかという批判の声は、個人的には賛成しかねる部分があります。

佐々木：なるほど。私は今のお話を聞いていて、ぜひ角田さんに聞いてみたいのは、もしかしたら生徒さんたちの間で、読書感想文や作文を書くときに、先生が読まれて指導が入ることもあると思います。そのときに、こんなことを書いてはいけないのではないかと、こういうことを書いたら怒られるのではないかと、真面目に書き直せと言われるのではないかと、生徒のほうが付度（そんたく）してしまうケースもあるのではないかと思います。私はむしろ波風立たないように、昔の恋愛が奥ゆかしいことがわかりました、楽しく読みました、面白く読みましたと無難に書いて出してしまうそうです。もしかしたら生徒さんの中には、ある種のコードを自分で読み取ってしまって、先生方の期待を裏切らないように付度して書いてしまう場合もあるとすると、その生徒さんにとっての読書感想文は、角田さんが体験したことと少し変わってしまうのではないかとこの気もします。だから、今のお話を伺っていて、角田さんがそこで本音で、本当に思ったことを言葉にして出すことができたということが素晴らしいと思うことが一つですし、おそらくそれができたのは、褒めた先生がいらっしやったということだと思います。だからそこで「角田くん、こんなひどいことを書いた

ら、、、。」と言うのではなくて、「そういう読み方もあるのか。なるほど。君はそう読んだのか」というふうに褒めてくれたということが、今大作家になった角田さんにとっても、中学のときに褒められた『伊豆の踊子』の読書感想文を覚えているということですから、国語の先生が褒めたということが非常に大きなことだったのではないかと、一瞬頭をよぎったんです。そういうところがありますか。

角田：もちろんそうですね。そもそも7～8歳で私が小説家になりたいと思ったのは、先生が作文を褒めてくれたところから始まっていますし、それから中学生になって、読書感想文でこんなことを書いても怒られないだろうかと思って書いても怒られなかった。目立とうとするのではなくて、ちゃんと自分が思ったことを自分の言葉で書けばわかってもらえるということが、今の自分の非常に大きな根っこみたいなものになっていると思います。

佐々木：角田さんの場合は、ご自身の思いを文章にすることに長けておられたということと、やはり好きなことを一生懸命真剣に向き合うということが幼少期からできたのだと思います。

角田：先生の会だから言うわけではありませんが、国語だけですが、やはり先生には恵まれていたと思います。小中高と一貫して、何を書いても認めてくれるという先生が国語に集中していたのでよかったのではないかと思います。

佐々木：非常に大きいように思います。その先生が角田さんにかけて言葉の一つ一つが、実は今の角田さんの血となり肉となっているのではないかと、今のお話を聞いていて、私は非常によくわかりました。こんなことを今申しあげるべきではないかもしれませんが、学校の先生に角田さんは小説家になると公言していましたよね。そのときに、作家になる、小説家になると言ったときに、なれるわけがないだろうと言われたことはなかったのでしょうか。何を夢みたいなことを言っているのか、できもしない夢をいつまでも追いかけて、もっと足元を見てしっかり勉強しろというような厳しいことを言われたことはなかったのでしょうか。

角田：なかったですね。小学校2年生の「作家になりたい」という作文に対して、国語の先生が「なれるといいわね。楽しみですね」と書いてくれたんですね。それは大きかったです。

佐々木：大きいですね。やはりそのような先生方の理解というか、励ましは、ずっとあったわけですね。

角田：国語だけです。

佐々木：やはり先生の存在が非常に大きかったということがよくわかりました。ありがとうございます。今の分野で一つ先生からご質問をいただいております。まとめのようなかたちになるかと思いますが、高校生の皆さんへメッセージがあれば、ぜひ一言いただいけませんかということです。どんな高校生活を送ることを勧められますか、というようなご質問をいただいております。角田さんのお立場からでけっこうですので、ひと言頂戴できればと思います。

角田：私は高校生のときに、受験しようとするまでは好きなことしかしてなくて、国語し

か勉強しないとか、あとは演劇部に入っていました。演劇部の活動をすることとお芝居を見に行くこと、それから当時はサザンオールスターズが好きだったので、サザンオールスターズのコンサートに行ったりと、よく遊んで過ごしていました。それも高校時代にしかできなかったことだとは思いますが、一方で私が歴史を勉強しなかった、数学を勉強しなかったということで、作家になってから非常に苦労しているわけです。今も苦労しています。何か書こうとしたときに、全部一から調べなければならない。本当に勉強すればよかったと何度思ったか、という状況なので、もし余力があれば、やはり好きな科目だけではなくて、全部の勉強をしておけば、おそらく全部役に立つだろうなということ、年を取れば取るほど実感しています。ですので、好きなことをやるのも大事だけれども、ちょっと苦手なこともやってみたら、自分自身の道が開けるのではないかと思います。

佐々木：あまりアレルギー反応を起こさずに興味を持って、やってこなかったことにもぜひ挑戦してみたらどうかということですよ。

角田：はい。

佐々木：ありがとうございます。では、次に移りたいと思います。作家生活とは、どんなものなのでしょうかと、皆さんが興味を持たれております。角田さんは数多くの作品を書かれておりますし、有名な賞を数々受賞されていますが、そもそもどのような経緯で小説家になられたのでしょうか。一般人から小説家になったタイミングというのでしょうか。そのときはどのような出来事があったのかということ、ぜひ教えていただければと思います。

角田：そもそも作文と小説の違いを知るために、つまり小説家になるために大学に進学しました。私が行った大学の学部は創作でした。クリエイティブライティング専攻に進みました。ですので、宿題がすべて小説を書いてくるということでした。私としては、小説家になるために大学に行っていますので、一刻も早く小説家にならなければ困ると思っていましたので、小説の勉強を始めるやいなや小説を書いて、これも先生に見てもらい、そのあと大学2年生のときから文芸誌の投稿を始めました。自分がそのときに天才型ではないということがすでにわかっていましたので、傾向と対策を勉強しました。どういう文芸誌があって、各文芸誌ごとにどのような特色の作家を生み出しているかを研究しました。そして、あるところにターゲットを絞って応募するというのが、大学生活の中にありました。ある応募をしたときに最終選考に残ったのですが、落ちてしまいました。その雑誌は、最終選考に残った段階で担当がつくんです。その担当の方が、私に連絡をくれました。あなたはまだ二十歳で若いから、うちの会社に少女向けの小説部門があるので、そちらで書いてみませんか誘ってくれました。私は一刻も早く小説家としてデビューしないと困るわけですから、「わかりました。書きます」と言って、大学3年、4年と少女小説をプロとして書かせていただきました。そのような経緯がある中で、ただ、少女小説というものが自分には合わなくて、少女小説の方からも、もう書かなくてもいいと言われてまして、大学卒業とともにクビになりました。ですから、大学卒業後1年間はアルバイトをしながら小説を書き直してはまた応募し直してという生活でしたが、大学卒業1年後には新人賞をもらい、ようやくデビューという形に

なりました。

佐々木：最初に応募していたときには、落ちはしましたけれども、少女小説作家としてデビューのような形には、一時的にはなったわけですね。

角田：最終候補に残った雑誌は文芸誌の純文学の雑誌でしたが、そちらでは落ちてしまって、少女小説に行ったので、少女小説家として一応デビューはしてまして、6冊ほど文庫本を大学時代に出しています。

佐々木：しかし、結局そちらには行かなかったわけですね。

角田：もともと純文学の雑誌に応募していたのは、そのような小説が書きたかったからでした。そのときに少女小説とは何かということも、そのようなジャンルがあるということも、実は知りませんでした。純文学の若い人向けのように捉えていたら、まるっきり違う世界で、1980年代の少女小説というのは、どちらかというところ少しコミックスに近くて、売上げが非常に重要であったり、シリーズ化が重要であったりという、けっこう色があつたので、これは私になりたいと思っていたものとは違うということも、2年間で学びました。

佐々木：今のライトノベルという感じでしょうか。

角田：そうですね。

佐々木：それで、もう一度リセットして、純文学で投稿して受賞したのが海燕新人文学賞ですね。

角田：そうです。

佐々木：では、コテコテの純文学の賞でデビューということですね。角田さんが狙っていたとおりになったわけですね。

角田：そうですね。ただ、私の傾向と対策で言うと、『海燕』は、今はない雑誌ですが、『海燕』はわりとがつつとした純文学というよりは、もう少し柔らかいというか、その当時若い人が多く書いていたり、吉本ばななさんがデビューした雑誌というイメージしやすいかもしれませんが、ばななさんの作品もがちり純文学というよりは、もう少し柔らかい感じだけれども、それでもきちんと純文学作品として評価してくれる雑誌という印象がありました。

佐々木：『海燕』という雑誌は、おそらくご視聴してくださっている方のなかには、まったく聞いたことがないという方もいらっしゃるかと思いますが、なくなっていました。今の5大文学賞と並んで、当時、福武書店さんが発刊していた有名な雑誌でした。私も角田さんとほぼ同世代ですけども、とても憧れを持って読んでいました。『海燕』から出られた方は、吉本ばななさんや、角田光代さん、小川洋子さんも確か『海燕』からでした。だから、日本を代表するメジャーな小説家の方々が『海燕』からデビューしています。私からからすると、角田さんと言えば、超アイドルでした。

角田：何をおっしゃいますか。

佐々木：本当ですよ。当時、文学をやっている20代の若者たちにとっては、角田さんはアイドルですよ。

角田：いえいえ、売れませんでしたから、大変でした。

佐々木：角田さんがすごいと思うのは、純文学だけではなくて、エンターテインメントというか、少し柔らかめの、多くの人たちに読まれるような分野でもお書きになられてることで。先ほどのご紹介にもあったように、純文学でデビューされているけれども、直木賞作家でもあります。これは、僕からすると本当に二足のわらじというようなイメージになります。角田さんにとってエンターテインメント小説を書くことと、純文学作品を書くことというのは、そんなに違うものでもなかったのでしょうか。

角田：いえ、違うことでした。非常に違うことでしたし、あえて意識して移行したんですね。もしかしたらこれを聞いてくださっている方は、純文学とエンターテインメントがそんなに違うのかなと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、雑誌がまずは違います。集英社であれば『すばる』は純文学ですし、『小説すばる』はエンターテインメント、新潮社であれば『新潮』は純文学で、『小説新潮』はエンターテインメントという、載る雑誌がまったく違いますし、書く傾向も違います。不思議な感じですよ。

佐々木：まったく色合いが違いますよね。

角田：違いますよね。私はやはり純文学の雑誌でデビューして、10年ぐらい純文学の雑誌を主にやってきましたが、だんだん仕事の依頼が来なくなりまして、自分でもうまく書けなくなったという気持ちが非常に強くありました。このままだとまた首になるかもしれないという焦りがあって、どうしよう、こんなに依頼が少なくなってきて、どうやっていけばいいのかと思っていたときに、エンターテインメントの雑誌の方が依頼に来てくれたのです。その方が言うには「やはり書き方を変えましょう。今までのようにゆっくり文章を選んで、じっくり書くのではなくて、ページをめくる手が止まらないような小説を書いてみませんか」と言われました。しかし私は、実はそれまでエンターテインメント小説とは何かを知らませんでした。ページをめくる手を止められないような小説かと、初めて思ったときに、これでクビにならずに済むかもしれないという光が差したんです。これから私は、ページをめくる手が止まらないような方向を目指そうと思って努力しました。

佐々木：エンターテインメント小説を書いたのも、努力のたまものだったわけですね。先ほどからお話を聞いていますと、作文を書くことも、小論文で大学に受かったことも、非常に努力をしていますよね。小説を書くのにも非常に努力をして書かれていますし、エンターテインメント小説でもそのようにおっしゃるので、私のなかでは、角田さんは本当に天才なのです。ほとんどの人が、角田光代さんと言えば天才作家だと思っていますよ。

角田：いつも崖っぷちにいました。

佐々木：崖っぷちで努力されて、新たに生きる道を見いだして、なんとかやって来られた人とは、誰も思っていませんよ。私がすごいと思うのは、『対岸の彼女』で直木賞を受賞されていますけれども、確かにこの作品は、ページをめくる手が止まらないです。

角田：本当ですか。

佐々木：本当です。

角田：ありがとうございます。

佐々木：本当ですよ。そんなにびっくりされるとは、夢にも思っていませんでした。『対岸の彼女』は、まったくジェットコースターのような話でもないですし、2人の女性の淡々と生きている日常の暮らしが語られているわけですが、読ませるための話の面白さとか、ジェットコースターみたいなことをしなくても、人間の営みを淡々と落ち着いた調子でうまく書くことさえできれば、ページをめくる手が止まらなくなるという。読んだときには本当に衝撃的でした。

角田：ありがとうございます。

佐々木：だから、エンターテインメントと言ったら、誰かが死んだとか、妊娠したとか、子どもを産んだとか、そんなことをしなければいけないのではないかと、みんなが思っていた節があるわけですが、それはまったく違うということを、角田さんが証明してくださったのではないのでしょうか。

角田：ありがとうございます。エンターテインメントと純文学の話では、先ほどの高校の授業の話とは、実は関わりがあるように思っています。純文学では、例えば歴史や数学の専門知識のような知識があまりなくても書けます。世界を自分の力でつくって、そのルールを自分で決めればいいので、現実を模写する必要はないのですが、エンターテインメントを書こうとすると、ファンタジーもそうでしょうか。エンターテインメントの小説は、わりと現実的に即しています。だから、あらゆる知識が必要になってくるのは、エンターテインメント小説のほうであると気づきました。つまり、頑張っただけで移行してからのほうが、自分の知識不足を痛感することが多くて、勉強しておけばよかったという後悔は、エンターテインメントを意識してからのほうが大きかったです。

佐々木：なるほど。その辺も、あとでまた詳しくお聞きしたいと思っています。角田さんの書かれる作品の背景の濃度と言いますか、例えば何かをテーマにして書かれたときに、それをどこまで調べて書かれたのかと、読んでいて非常に強く思います。あとでお聞きしようと思いましたが、やはり『タラント』ですよ。

角田：すみません。お忙しいのに読んでくださって。

佐々木：それこそ歴史はまるっきり駄目だったと角田さんご自身がおっしゃっていましたが、この作品には世界情勢や歴史などの膨大な背景が集約されていました。どれほど大変なご苦労があつて書かれたのだらうかと思いました。今の話にもつながるわけですが、やはり努力の方なんだなということを、あらためて実感しました。ありがとうございます。

角田：ありがとうございます。

佐々木：高校の先生方から、作家生活についてご質問をいただいておりますので、ぜひお聞きしたいのですが、「角田さんが作品を執筆するときは、何作品も同時に執筆されているのでしょうか」というご質問をいただいております。同時進行で書かれることはできるのでしょうか。

角田：30代から40代の半ばまでは同時進行をしていました。2015年に『源氏物語』の現

代語訳を始めるわけですが、2015年までは同時にかけて持ち書きしていました。『源氏物語』を挟んで、今はそれを一切やめました。

佐々木：そうですか。同時進行というのは、今まったくやっけていられないということですか。

角田：やっけていないというか、以前は無尽蔵にできていましたが、できなくなってしまいました。

佐々木：神がかっていましたね。しかし以前できていたことができなくなったというのは、何が変わったのでしょうか。

角田：やはり『源氏物語』をやった5年間で、小説を書くというコツみたいなものを少し忘れてしまったということと、あとは単純に10年前よりも体力が衰え、集中力も衰え、同時にやるのが非常に難しくなっていました。

佐々木：今の話につながるかと思いますが、先生方からのご質問で「一日の中でどれぐらい執筆時間を費やされているのでしょうか」というご質問です。

角田：朝の8時半に仕事場に行って、夕方4時半に帰ります。この間が執筆時間になりますが、ずっと書いているわけではなくて、机の前にはいますが、集中力が切れればインターネットを見たり、ネコの動画を見たりして、4時半には終わります。

佐々木：毎日出勤する感じですね。

角田：そうですね。

佐々木：8時半から始めて4時半なので、だいたい7時間ですね。

角田：7時間労働ですね。

佐々木：サラリーマンのようですね。

角田：そうですね。

佐々木：おそらく皆さんがイメージされているのは、夜みんなが寝静まった9、10時ぐらいから書き始めて、夜が明けるタイミングまで仕事をされているような、作家の方のイメージがあるようです。吉村萬壺さんは、いつも朝5時か6時に寝ておられて、夜中に仕事をされているそうです。私が起きる時間と、吉村萬壺さんが寝る時間がまったく同じです。だから、朝の10分とか15分ぐらいはお話ができたりします。三島由紀夫は、夜10時から朝6時までの執筆時間というスタイルを生涯崩さなかったそうです。どんなに夜に飲み会やパーティーがあっても切り上げて、夜10時から朝まで必ず執筆していたそうです。だから作家の方というのは、スタイルはまちまちですね。

角田：そうですね。

佐々木：角田さんはどちらかというと、本当にサラリーマンが出勤するように朝から始めて夕方まで書いていられるわけですね。

角田：はい。

佐々木：そのほうが、効率がよかったですのでしょうか。

角田：私の場合は、そのほうが非常に効率はいいですね。

佐々木：夜やるよりも、朝からのほうが断然効率がいいわけですね。

角田：はい。

佐々木：終わったら、飲みにも行かれるのですね。

角田：そうです。なぜサラリーマン時間になっているかという、以前は夕方5時まででしたが、だいたい会社員の方が飲み始めるのが7時ぐらいかと思います。この時間に自分も飲みたいわけですが。皆さんが仕事を終えて飲んでいる時間に、一人で働いているという状況が耐えられないです。

佐々木：それも大事なことですよね。おそらくメンタルの部分で、リズムは大切だと思います。あともう一つ先生方からのご質問ですが、これは私も興味がありますが「書きたいことや題材というのは、どんなときに思いついたり、きっかけができたりするのでしょうか」というご質問です。

角田：少し漠然としていて申し訳ないのですが、例えば日常生活で普通に電車に乗ってどこかに行って、誰かに会って帰ってきて、テレビを見たり、新聞を読んだりしてという、普通の生活の中で、ときどき何かおかしな世の中になっているなど思うことがあります。何がおかしいと思っているのだろう、何に引っかかったのだろうかということ煮詰めていくと、わりとそこが小説のテーマになったりすることが多くあります。

佐々木：では、本当にさりげない日常のなかの一コマで、心に引っかかってくること、そこがきっかけになっているということでしょうか。

角田：そうですね。それはおそらくそのことについて自分が考えたいのだろうと思います。深く考えたいことなのです。ただ、小説を書かなければおそらく忘れてしまいます。私にとって小説を書くということは、自分なりに考えるということと非常に近いです。答えは出なくてもいいというか、出るはずもないんだけど、考えることによって、違和感を感じたときから考えたことで違うところに出ることがあって、おそらくその過程が私にとって小説なんだと思うのです。

佐々木：なるほど。やはり私は思うのですが、角田さんは作家という職業が天職なんだと思います。一般の人は、心に引っかかることや、解せないことや、理不尽だと思うようなことがあっても、そこで止まってしまって忘れてしまうというか、そこを問題化しきれないと思います。それを広げて、深く掘り下げていくところが、角田さんの真骨頂というか、、、。だから、角田さんが書かれるものというのは、誰も知らないような世界の特殊な人が描かれているのではなくて、私たちの暮らしの中で、本当に隣に住んでいるのではないかというような人たちや、身近にいるような人たちが描かれていることが多いですね。その人たちの中にある社会的な何かわだかまりや問題が、その人の人生に関わってくるような作品だから、読んでいても非常に身近に感じられるような気がします。先ほどの話にも関わってきますが、題材を思いついても、それを小説作品にするまでというのは、非常に大変なのではないでしょうか。

角田：そうなんですよね。ぱっと考えたことと、設定だったり、テーマというのがすぐに結

びつけばいいですけども、そうではないこともあるので難しいですよ。

佐々木：私は思うのですが、これを作品に書こうと思われてから書かれるまでの間に、取材やいろいろと調べたりをされて、そのうえで、よし、行ける、スタートという感じで作品が始まって、書かれていくわけですか。

角田：実は、連載でなければ、私はなかなか書けません。自分で書き下ろしというのでしょうか。1冊まるごと締め切りがない状態で書くということができないので、締め切りを設定してもらえないと書けません。ですので、すべて連載の予定が入っています。その連載の予定に合わせて、例えば1年後に始まる連載であれば、今の時点ですぐに資料を読んだり、取材を始めたりして、その1年後の連載に備えるという感じになります。

佐々木：例えばですが、最初にこれで小説を書きたいと思って、膨大な資料を集めたり、調べものをしてやっていくうちに、これは違うとか、これは作品になるのだろうかという疑いが芽生えたりは、ご自身の中ではしないのでしょうか。最初の段階から行けそうだったと思ったら、最後まで行けるものなのでしょうか。

角田：今の質問は、非常に怖いですね。とても怖いことですよね。今、ぞっとしたんですけど。例えば来年とか、半年後にまで連載が迫っていて、資料もたくさん集めて読んでいて、人を回って話は聞いているけれども、これは違うと思ったら、夢に見そうなら怖いんです。

佐々木：しかし角田さんは、それが無いわけですよね？

角田：おそらく今までにもあったような気がします。ただ、そこで資料や、考え始めたプロットも、全部捨てることは非常に恐ろしいことですので、無理やり使っている気がします。今の佐々木さんの質問は、今後、私をトラウマにさせるかもしれません。

佐々木：ごめんなさい。そんなに恐ろしいことになるとは夢にも思わず、うっかり口にしてしまいました。

角田：それは非常に怖い状況ですよ。

佐々木：私なんかは、そんなことはしょっちゅうあります。だけど角田さんは私のなかのイメージだと、これで作品を書こうと思ったその日から書き終わるまで、一本道で書かれる方というイメージがあります。迷いなく作品ができてしまうような、完成したら傑作になっているという。

角田：それは、これは違うと思ったら、資料を全部よけてしまうのでしょうか。

佐々木：だから、止まってしまう感じです。パタッと止まってしまうイメージです。頭の中で迷いが生じて信じられなくなると、一步も前に進むことができなくなってしまうという感じです。僕のイメージだと、角田さんはそんな人ではないのです。どんな長編であろうと、止まることなく書いてしまう方なんだろうと思っています。

角田：捨てる勇気のほうが大きいですよ。

佐々木：角田さんは、僕の中では本当にすごいです。すみません。ただのファンになってしまっていますね。失礼いたしました。この部分では最後にぜひ伺いたいのですが、作家生活をされていて、やりがいや喜びを感じたりすること、非常につらいと感じられることはある

のでしょうか。角田さんご自身でそのように感じられることはありますか。

角田：つらいのはやはり日常的につらいです。うまく書けないということと、これでいいのだろうかという不安みたいなものはいつもあります。書くということ自体が、少し苦しみも含まれていると思います。

佐々木：私のなかでは、角田さんはまったく苦しまずに書かれているように思っています。

角田：苦しいことですよね。うれしいことはありますよ。時折うれしい感想を聞いたりすると、やはり非常にうれしいですし、少しでもうまく書けたという感覚があると、ちょっとうれしいです。

佐々木：自分の中でうまくいったという実感が得られるときですね。ありがとうございます。それでは次の部分に移りたいと思います。角田さんの作品についてです。これはぜひ私も聞いてみたいところですが、先生方からのご質問で「角田さんご自身の作品の中で、高校生に読んでほしいと思う作品があれば教えてください」というご質問です。

角田：高校生にこれは読んではいけないというものはすぐに思いつくのですが。

佐々木：どの作品でしょうか。『紙の月』でしょうか。

角田：『紙の月』や『八日目の蟬』『愛がなんだ』など、高校生はまったく読む必要はないと思います。

佐々木：しかし『八日目の蟬』などは。

角田：読まないほうがいいですよ。

佐々木：そうですかね。

角田：読んでほしいというよりも、読むものを選んでほしいと思います。

佐々木：選んでほしいというのは、つまりどういうイメージでしょうか。

角田：やはり生きることがむなしくなるようなものとかは、。でも、自分自身が高校生のときには読んでいたかな。

佐々木：結局むなしくなるような人生というものに対するネガティブなラストを迎えるような作品でも、それは逆に、心がときめくようなことから遠ざかっている高校生たちや、若い人たちの心に寄り添うものになったりするケースもあると思います。励ましではないですが、簡単な正しい言葉が、必ずしもへこんでいる人たちの励ましにはならないというような、そんなイメージで私は見えています。だから『八日目の蟬』を取ってみても寄り添う感じではないですが、女の子が成長していく過程が描かれているし、その子が、自分が生きていく場所を見いだしていくような話なので、そこは必ずしも読んでほしくない本には入らないです。私は高校生たちに傑作として薦めるかもしれませんが、では、角田さんご自身が高校生たちに、読んでほしいと思う作品がもしあればということですが、いかがでしょうか。

角田：自分の作品の中でということでしょうか。

佐々木：はい。

角田：自分の作品においては、『学校の青空』というのが河出文庫から出ていますが、これは中学生、高校生が主人公だったりします。明るい話ではなくて、少しへビーな話もありま

すが、確か女子高校生たちの話などもあるので、もしかしたら同世代の気分で読んでもらえるかもしれません。

佐々木：河出書房新社から文庫で出ている『学校の青空』という作品ですね。皆さん、メモを取っていただけましたでしょうか。ごめんなさい。私は、この作品は未読でした。

角田：まったく問題ありません。

佐々木：すみません。このおじさんが女子高生の話などは読まないほうがいいかとも思いますけれども、逆に私が念入りに読んでみると、変に思われるかもしれませんね。今後読んでみます。ありがとうございます。角田さんご自身の作品で、個人的に特に思い入れのある作品はありますか。もちろん、書かれた作品はどれも思い入れがあると思いますけれども、いかがでしょうか。

角田：そうですね。特にこれという思い入れは、あまり持っていません。

佐々木：角田さんは逆に、ご自身の作品はどれも愛着をお持ちで、とても優劣はつけられないということでしょうか。それよりむしろ、自分の手を離れたらあまり心の中に残っていくという感じではないのでしょうか。

角田：そうですね。終わったらわりと自分の中にない感じになります。

佐々木：なるほど。あとは読者の皆さんに委ねられるという、旅立っていくという感じなのでしょうか。

角田：そうですね。ですから、わりと興味があるのは、やはりこれから書くものになります。

佐々木：今のお話につなげていただいて、これからこういう作品を書いてみようとか、お話しいただける範囲で構いませんが、関心を持っておられることや、このような作品を書いてみたいと思われているようなビジョンや、構想とかはありますか。

角田：それが、今はありません。源氏訳が終わってから、以前と自分の状況が変わってしまって、以前は次の次ぐくらいまでアイデアなり、書きたいことなりがありましたが、本当にどうしていいかわからないくらい、小説の書き方を思い出せない状態です。ですから、この先何を書いていけばいいのかという、迷いの中にある状況です。

佐々木：信じられませんね。角田さんが迷いのなかにいるというのは、まったく理解ができません。釣り名人が釣りのやり方を忘れてしまったというようなことに近い感じですよ。あとは、世界記録を持っているアスリートが、走り方を忘れてしまったというような感じでしょうか。

角田：例えが大きすぎます。

佐々木：それぐらいのイメージなんです。それぐらい『源氏物語』のお仕事というのは、角田さんの人生においても大きかったということでしょうか。

角田：そうですね。5年間を費やしたわけですから、この5年間は、まったく自分の小説を書いていないわけです。自分の小説を5年間書かないというのは、18歳で大学に入ってから一度もなかったわけです。ですので、やはり5年間で相当調子が狂ってしまったのだろうと思います。楽器も毎日弾かないと後退するとよく言いますが、やはり小説もずっと自分

の中で書き続けてきたものでしたので、それを止めてしまったが故に、いまだに調子を取り戻せていないというのが、実は正直なところです。

佐々木：『源氏物語』のお仕事で得られたものというか、角田さんが新しく開いた境地みたいなものというのは、やはりありましたか。

角田：『源氏物語』をやって一番よかったのは、『源氏物語』は面白いと思えたことが一番大きかったです。

佐々木：大きいですね。

角田：はい。あとは、もう一つ非常に大きな気づきとしては、小説というのは、物語と言い換えてもいいですけども、物語というのは、あらすじよりも、その物語のなかに書かれた人間が活着しているかどうかだという、非常に強い気づきがあったんです。それが真実だとは言いませんが、自分にとっての気づきがあって、、、。私はそれまでエンターテインメントについてこうと思って努力していたときに、やはりあらすじを非常に重要視して考えていましたので、あらすじをいかに生かすかというところで努力していました。しかし、そうではなくて、あらすじよりももっと重要なのが、そこで書いた人間が、つまり架空の人間が生き生きと声を持って、体温を持って立ち上がるかどうかということが重要で、それは、実は作家の筆力とは関係がないのではないかと感じてしまいました。それが自分にとっては一番大きなことだったような気がします。

佐々木：作家の筆力と関係がないというのは、どういうことでしょうか。

角田：いくらこの人物を生き生きとさせようと思っても、言葉を尽くして書いても、おそらく立ち上がらないときは立ち上がりません。

佐々木：そこで立ち上がってくるというのは、何が働いているのでしょうか。

角田：そこがわからないのです。だから、おそらく今書き悩んでいるということも、わからないからだと思います。どうすれば人間が生き生きと生きる小説を書けるのか、ということがわからないというのが今は一番大きな問題です。書いてみるしかないと思っています。書いてみて、立ち上がれ、立ち上がれと、こっちは祈るしかないという気が、今はしています。

佐々木：信じられないご発言ですね。私は今、ぽかんとしている状態ですけども、角田さんの言葉とは思えません。角田さんの書かれる作品の人物は、私の中ではすごく生き生きとした存在で読んでいました。しかも生き生きと存在しながら、なおかつストーリーの展開、話の筋というのでしょうか。登場人物も活着している。話の筋も非常に躍動していて、それが両立できているように見えていますので、角田さんがそんなことをおっしゃるというのは、信じられないような気持ちです。ご自身では、そのように活着している人物のように描けているという自覚はあまりないのでしょうか。素晴らしく描けているのではないのでしょうか。

角田：それは考えたことがありませんでした。今まで書いてきたときに、あらすじ、ストーリーに非常に意識を向けていたので、人間がそこで活着しているかどうかということはあまり重要視していませんでした。それはこのキャラクターにやる気があるかないかということとは常に考えてはいましたが、その人間が立ち上がって活着しているかどうかということと、

リアリティーがあるかないかということは、似ているようで少し違うと思うのです。

佐々木：なるほど。

角田：ですから、リアリティーを与えることはできるのですが、では、この人はこういう考えをする人だというリアリティーを持たせたところで、その人が立ち上がって動くかという、作家はこれができないという気がしてきたんです。

佐々木：信じられないようなご発言だと思いますが、小説を書いている、角田さんの作家の手を離れて登場人物が動き始めて、角田さんが予想しないような展開を始めるという状況は、しばしばあるのでしょうか。それとも、ほとんどないのでしょうか。

角田：書き終わって、手を離したら関与していないので、その後どうなったかは、あまりわからないですね。もしかしてですが、作品が映像化されたりしますが、あれは私が選べるわけではありませんので、映像化したいという声が挙がるものというのは、もしかしたら生きていて感じられる人がいる小説なのかもしれません。だから作り手がイメージしやすいとか、生きた役者さんでイメージしやすいのだろうと思います。

佐々木：角田さんのなかでは、読者の方がそう思ってくださいるのであれば、という立ち位置になるのでしょうか。

角田：そうですね。

佐々木：話が戻りますが『タラント』を読ませていただきました。

角田：読んでくださって、ありがとうございます。

佐々木：そこに出てくる登場人物は、非常に生き生きというか、生きているのではないのでしょうか。そのように思いながら、登場人物が立ち上がっていきます。主人公も、私の中では非常に生き生きとしています。まだお読みになられていない方もいらっしゃるかもしれませんが、角田さんの最新刊である、今年発売されたばかりの作品ですが、今どこの本屋さんに行かれてもあると思います。この作品も、私は高校生や大学生に読んでもらいたいと思いました。今のこの時代というのを面白く表していると思いますし、非常にリアルな作品というか、今を切り取られた作品だと思いました。私が小説を読み終わって、全部振り返って一番感動したのが、主人公はおじいちゃんであったということでした。これは読み終わったときに、心に穏やかな充実感をもたらしてくれる作品でした。

角田：ありがとうございます。

佐々木：素晴らしい作品だと思います。

角田：4年ぐらい前に徳島に呼んでいただいたときに、前の晩に高松に行ってきたという話をしたことを覚えていますか。

佐々木：覚えています。

角田：それは『タラント』の話を考えに行ってたんです。

佐々木：そうだったんですか。

角田：小説が書けないから、どうやって書いたらいいのかわからなくて、前に話を思いついたことがあるから、高松に取りあえず行けば何か思いつくことがあるかもしれないと思っ

て、徳島に呼んでもらったのは2019年でしたでしょうか。

佐々木：確かそうでした。コロナの前でした。

角田：前ですよ。徳島に呼んでいただいたので「高松に行って来ました」と言うと、「そんなことで話が思いつくものですか」と聞いてくださったのを覚えています。それが『タラント』です。ですから『タラント』の話ができてうれしいです。

佐々木：そうでしたか。皆さん、この本は非常に分厚い本です。400ページ余りあります。でもね、読み始めると止まらなくなります。角田さんは書き方を忘れたとか、書けないとおっしゃっていますが、角田光代節炸裂だと思います。この作品を書き終わられたのは最近ですよ。

角田：そうですね。『源氏物語』が終わって、新連載が始まって、新聞連載をしていたものです。

佐々木：最終的に原稿が完成したのは、今年になってからですよ。

角田：はい。

佐々木：まだ読まれていない方がいらっしゃると思いますが、この作品は本当にお薦めです。私は角田さんと前にお会いしたときも、『八日目の蟬』があまりにも素晴らしいという話をさせていただきました。難しい比喻で申し訳ありませんが、アメリカ辺りから飛行機がものすごいスピードで地球を半周していて、私が徳島で指を輪っかにして広げていると、ここにスパッと入ってくるという感じです。それぐらい神業みたいな作品です。非常にわかりにくい比喻で申し訳ありません。角田さんの作品を昔から拝読していて、いつもそのような感覚でした。『タラント』でも同じ感覚を覚えました。この長い作品の前半部分で、すさまじく拡散していた話が、まん中辺りを境にすさまじい勢いで収れんしていきます。しかも全部のベクトルが、これぐらい的に向かって集まってきます。琵琶湖ぐらいに広がっていたものが、最後に向かっては、半径5センチぐらいのところに全部入ってくるのです。こんなものは、とてもじゃないですが書けません。こんな作品が書ける人は尋常ではありません。神業のような印象を、今回も私は受けました。それと、この作品が完成したときというのは、ウクライナで戦争がまだ始まってなかったんですよ。

角田：そうですね。

佐々木：そうですね。

角田：そうなんですよ。

佐々木：それでこのラストですよ。やはり神がかかっています。だから、新聞連載での後ろの奥付を見ても、この作品が完成して手を入れられる状況になったときも、戦争は始まっていなかったと思います。このラストのおじいちゃんの言葉というのは、これが書かれているというのは、何かわかりませんが、小説の神様が手助けしているとしか思えません。私のなかでは、角田さんは本当に小説の神様が手助けしている人なのです。小説の神様に寵愛を受けている人なのです。

角田：いいえ、崖っぷちですから。

佐々木：だから、私のイメージと、角田さんがおっしゃる崖っぷちのイメージが合わないのです。毎回ずれてしまいます。今回も同じようなお話をしました。最後になりましたけれども、先生方からのご質問がまだ残っているものがあります。「現代の作家で、好きな作家と作品はありますか」というご質問をいただいております。

角田：現代の作家ですか。生きている作家ですよ。

佐々木：生死はこだわらなくても大丈夫かと思えます。

角田：新刊が出て必ず買うのは、ジョン・アービングとイーロン・リーさんです。中国人ですがアメリカに住んでいまして、英語で小説を発表しているイーロン・リーさんという方です。日本人では、桐野夏生さんも好きですし、吉田修一さんは同世代ですけども、彼の新作も必ず読んでいます。好きな人はたくさんいます。思いつく方はその方々です。

佐々木：やはり読まれることで自分に得るものがあるという感じなのか、それとも読んでいることが楽しいのでしょうか。

角田：読んでいることが楽しいです。

佐々木：角田さんが読まれて、角田さん自身が心に響いた作品というのは、楽しいと思う作品、小説の特徴、共通点みたいなものは何かあるのでしょうか。

角田：ライトなものがあまり好きではありませんので、ただの恋愛などは読めませんので、恋愛の奥に何かあるとか、もう少し引きずり込むようなものが好きです。ただのいい話は好きではありません。

佐々木：ある程度ヘビーな、ナーバスになるような内容がお好きのようですね。

角田：はい。

佐々木：重いと感じるものが重苦しい感じになるかということとそうでもなくて、角田さんの中では、その読み応えみたいなものを非常に感じられるということですね。

角田：そうですね。

佐々木：ありがとうございました。あっという間で、実は時間が来てしまいました。最後に、今日ご視聴いただいている先生方に、角田さんから何かお言葉を頂戴できればと思います。

角田：今日はお招きいただき、誠にありがとうございました。第7波がなければ、私も本当に徳島に行きたくて、また佐々木さんたちと一緒においしいお刺身を食べるつもり満々でしたが、本当に行けずに残念でしたので、もう少し落ち着いたところに、もしまた呼んでいただければ機会がありましたら、ぜひ伺いたいと思います。今日は誠にありがとうございました。佐々木さんも素晴らしい進行をありがとうございました。

佐々木：ありがとうございました。もし次回機会がありましたら、角田さんにはぜひ徳島に来ていただいて、今日はご視聴いただきましたが、皆さんに直接お話を聞いていただければ、心から願っております。角田さん、本当にありがとうございました。

角田：ありがとうございました。

佐々木：それでは、事務局の先生にお渡しいたします。

角田：失礼いたします。

司会：角田先生、ご講演ありがとうございました。それでは、ご講演いただいた謝辞を、副会長の三井敏之城南高等学校校長が申し上げます。

三井：角田先生、大変面白い話を本当にありがとうございました。また、聞き手として角田先生の魅力をさまざまな角度から引き出していただきました佐々木先生、ありがとうございました。本日の参加者を代表しまして、ひと言お礼の言葉を申し上げます。今回国語学会で角田先生の話をお伺いするというのを、大変多くの会員が本当に楽しみにしておりました。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の第7波の影響もあって、直接お会いすることができませんでした。ひと昔前なら、残念だと、また機会があったときになってしまうところを、それぞれの地をつないでこのようにリアルタイムでお話が聞けるという、最近の情報通信技術の進歩に、非常に感謝をしながら聞いておりました。今日聞かせていただいた角田先生のお話も大変興味深いもので、あっという間に時間が過ぎてしまいました。楽しい時間がもう終わってしまうのかと思うと、本当に残念でなりません。先生のお話を伺って、教室の生徒の顔を思い浮かべると同時に、想いというものを持ち続けるということが本当に力になるんだということを感じました。また、読書感想文を書くということが、読書の長い目で見るとつながっているというお話は、本当に興味深く印象に残るとともに、承認するという力、承認の力というものを再認識することができました。先生からいただいたお話を私たちのエネルギーに換えまして、明日からまたそれぞれの現場で力を尽くしていきたいと思っております。また日常生活の中で、ふと感じた疑問もしっかりと考えるような生活を自分自身心がけていきたいと思っております。本日は誠にありがとうございました。

司会：ありがとうございました。それでは、角田先生に、今一度大きな拍手をお送りください。本当にありがとうございました。（終了）